
叶わぬ思い、告げる言葉

U-Ton

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

叶わぬ思い、告げる言葉

【著者名】

Z4985H

【作者略名】

U-Ton

【あらすじ】

わけがわからんとみんなが言つと作者が自負する作品です。

(前書き)

昔書いた物をリストアレンジして載せてみました。

・・・青い。空が・・・青いと感じじる・・・。

「おい。麻奈。起きているんだろ?」

「・・・」

「全くお前どいつもは・・・」

「・・・」

ただ私の前には・・・青い空が広がっている。
どうしたんだ?・・・。
わから眠い。

「麻奈!..起きるー!..」

「・・・」

「ま・・・? ? ? ! ..」

「・・・!..」

「くけけけ。ついに見つけたぞ!..覚悟しろ!..」

私の名前を呼んで起きていた彼の動きが急に止まつた。
時間が遅くなる。

その感じを私ははじめて知つた。

私の師匠。そして私の・・・初恋の人・・・。

でも、もう私にはわかつた。

彼がもうその口で私の名を呼んではくれないこと。

そして、魔族に・・・私たちが敵対してきた輩に眠りの魔法をかけ

られ・・・

殺される運命にあることに・・・

終わった・・・

朦朧とする意識の中、私はそう思つた・・・

気がつくとそこは闇だつた。一寸先も見えないとほこのことと言つただろう。そして、私は浮いていた。

“ 麻奈、よく聞け。 ”

頭の中で彼・・・師匠の声が響く。

師しょ・・・う・・・死んだはずじゃ？

“ 戸惑つてゐるな、麻奈。それもしあうがないだらう。これを聞いていると言うことは、俺はもう死んでいるはずだからな。 ”

じゃあ、なんで声が聞こえるの？

それよつこにはど？

“ これは俺が死んだら自動的に流れる遺言書・・・みたいな物だ。質問にも答えてやれないし、俺も先代から聞いたことしか、知らない。 ”

え・・・?どういうこと？

意味わからぬいんすけど？

私が混乱している中師匠であつた男は坦々と告げていく。

“ まず。俺がどんな仕事をやつてきたかは何年も一緒に生活してその仕事を共にやつてきたからわかつてゐるはずだ。 ”

彼の仕事は人間界にあらわれた魔族のうち人を殺そとする者を抑える、または還すというものの。

15歳の頃彼に恋し家族を捨ててまでついてきたのだから・・・それくらいはわかる。

“許せ、麻奈。俺はお前にひどいことをしてしまった。”

それは、そうだ。結婚する前から未亡人だなんて。
責任をとつて欲しい。

しかし、どうやら私の文句と彼の謝罪は関係がないようだつた。
彼の声は淡々と事実を述べていく。

“この仕事は昔から男、女、男、女と次いできた。”

それは、どういう意味だらうか。
私に彼の職を次げというのだらうか・・・？

ただ、彼の邪魔ばかりして一向に役に立てなかつた私に・・・？

“そして、先代は先々代を愛し、先々代は先々代を愛し・・・と言
う風に続いていつたんだ。”

・・・はい？ちょっと待ちなさい？
それ・・・どうこうこと？

“100年前俺は俺の師匠に当たる女、つまりは先代・・・いや今は先々代になるのかな、を愛し家族を捨ててまで力にならうとつい
ていつた。”

それ・・・私と同じパターン?
待つて・・・ということは・・・

“死んでいく者の言葉は一生の枷になる。それが愛している者の言

葉ならば特にな・・・”

不意に頬を濡らす感覚がした。

彼は死んだ・・・それが確実になつた・・・
そして、私には彼が次に言つことがわかつた。

“俺の後を次いでくれ。そして、少しでもこの地球上に起る苦し
みを・・・救つてくれ。俺が先代から引き継いだ力を・・・与える
から。”

私はショックで何もしゃべれなかつた。
ただただ、涙で頬を濡らすだけだつた。
暗い闇に一つの白い光が灯る。

“ 麻奈、いや現代当主麻奈に先代当主である私の力の全てを与える。

”

私の師匠・・・私の最愛の人の声が闇の中から聞こえた・・・
私はなす術もなく光に包まれる。
そして力が湧き上がつてくるのを感じた。

流れる涙を手で拭い・・・そして、闇に向かつて1礼をした。

“ 麻奈、愛してるよ・・・”

最後に彼はそういうような気がした。

「あ〜畜生。惚れたからつて家族捨ててまでついて来るんじゃなか
つた。」

「はいはい。そんなこと言つてゐる暇があつたら手伝つて。」

あれから100年後、魔法によつて老いなくなつた私は1人の少年と同居してゐる。

そして、彼の意思を受け継いで魔族を倒してゐる。

今私は自分の死期が近づいていることを悟つてゐる。

私にはあの時の師匠の気持ちがよくわかると共に・・・この少年のこれから的人生に辛い、辛い足枷をはめてしまうことに・・・自己嫌悪を感じてゐる。

でも、微かに、ほんの微かに、この青年とこの先ずっと生きていけるのではないか、という希望を抱いてゐる。

もちろん、叶わない希望であることは知つてゐる。

でも、そう願わずにはいられないのだ。

君に出会えてよかつた

あなたに出会えてよかつた

幸せな時を過ごせたから

でも、私は感じてしまう

いつかは破壊されることへの不安

君と言う存在に出会えたことを後悔したくはないから

今も私はひたすら歩み続ける

それはけつしてむくわれない思い

報われてはいけない思い

だけど追いかける

命という炎が消えるまで

人は悲しみを恐れ

喜劇をこのむ

みんな生まれてきた事自体が

最大の喜劇であり
悲劇だと叫うのに

悲劇？喜劇？

なにが悲劇で何が喜劇なのであらう
悲劇だつて見方を変えれば喜劇になりうる
喜劇だつて見方を変えれば悲劇になりうる

だけど私は忘れない

貴方と会い

貴方と話し

貴方と共に同じ瞬間を生きたことを

そして私は走り続ける

自分の破滅を求めて

破滅は怖い

でも、破滅はゴールだ

私たちが永遠に逃れられないゴール

だからこそ何も気にせずに寛つ走れる

だつてどつちに行つたてゴールにはたどり着けるんだから

だから私は最後の瞬間まで走り続けよう
そう。この身の破滅が来るまで

このバトンを次に託すまで

別れの言葉・・・辛いけども告げて旅立とう

“愛していたよ・・・”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985h/>

叶わぬ思い、告げる言葉

2010年10月28日02時58分発行